

マリヴォー『マリアヌの生涯』における対話と人間観

竹 垣 江梨子

演劇と小説のジャンルにおいて人間心理を細やかに表現したマリヴォーは、理論的著作よりもフィクションの作品によって、そのモラリストないしフィロゾフとしての思想を展開した作家であると言える。長編小説『マリアヌの生涯』は、孤児であるマリアヌが貴族・小ブルジョワ・修道女といった異なる社会集団の間を行き来する物語であり、そこには作家の身分制社会に関する考察が発揮されている。

この作品に見られる人間と社会的身分(état)の関係については、レオ・シュピッツァーの論考がある。これによると、主人公マリアヌの言動は、いかなる外的状況にも屈しない「心の気高さ」に貫かれたものであり、それはマリアヌの「本当の出自」である貴族身分に由来するものである¹⁾。そして、このような人物像の背後には、人間の社会的身分と道徳的資質が一致するという考え方、すなわち「理想主義的な人間観」が横たわっているという²⁾。マリヴォーの人間観を考えるにあたり、この考察は重要である。しかし、こうした人間観の表出をより奥行きのあるものとして捉えるためには、この作品を構成する異質な社会空間についての考察が必要であると考えられる。この点に着目する時、「理想主義的な人間観」では回収しきれない社会と人間との関係性が見出されるはずである。本論考は、物語の舞台となる複数の社会空間相互の違いを視野に入れ、作品が描く人間観を読み直すことを目指す。それぞれの社会集団における人間のあり方は、登場人物たちの言葉から導き出すことができるだろう。

また、この作品を解釈するにあたって、フィクションの枠において思想を展開したマリヴォーの独自性を重視するならば、文学作品ならではの表現形式と思想の関係という点にも注意を向けるべきであろう。特に、この作品において重要な位置を占める対話の形式と思想との関係については、これまであまり検討されてこなかった。多種多様な登場人物の台詞のやりとりが、思想表現の装置としてどのように機能しているかということには、考察の余地がある。そしてまた、対話の名手であったマリヴォーが、物語中の対話にモラリスト的考察を持ち込むことで、どのようにこの表現形式を展開させたのかということも考えられてよい。こうした観点から作品の対話部分を分析することで、マリヴォーの対話技法と人間観の関係を探り、そこに作家の独自性を見出すことを試みたい。

1. 対話の手法とモラリスト的考察

登場人物たちの対話に作家の人間観の表出を見るにあたり、マリアンヌとクリマルの対話場面の考察から始めたい。裕福な貴族であるクリマルは、身寄りのないマリアンヌに金銭的援助をする。この人物は信心深く人当たりもよい慈善家として通っているが、その裏には援助を理由に彼女を愛人にしようという魂胆がある。マリアンヌは彼のよこしまな気持ちに気づきつつも、自分は潔白であろうとする(あるいは潔白であるように見られようとする)ため、クリマルの愛の告白に気づかないふりをする。

[...]vous êtes si aimable, qu'on ne manquerait pas de croire que je vous aime.

Oh! il n'y a rien à appréhender, repris-je d'un ton ingénu ; on sait que vous êtes un si honnête homme! Oui, oui, dit-il comme en badinant, on le sait, et on a raison de le croire ; mais, Marianne, on n'en est pas moins honnête homme pour aimer une jolie fille.

Quand je dis honnête homme, répondis-je, j'entend un homme de bien, pieux, et plein de religion ; ce qui, je crois, empêche qu'on ait de l'amour, à moins que ce ne soit pour sa femme.

Mais, ma chère enfant, me dit-il, vous me prenez donc pour un saint? Ne me regardez point sur ce pied-là ; vraiment, vous me faites trop d'honneur, je ne le suis point ; et puis, un saint même aurait bien de la peine à l'être auprès de vous ; oui, bien de la peine : jugez des autres³⁾.

この場面は、フレデリック・ドゥロツフルも指摘しているように、モリエールの戯曲におけるタルチュフとエルミールのやりとりを彷彿させる。別の部分でマリアンヌ自身が繰り返しクリマルを「Tartuffe」と呼んでいることから、この似非信心家・偽善者の典型がクリマルに重ねられていることは明らかである。以下が対応する『タルチュフ』の場面である。

Elmire : La déclaration est tout à fait galante,

Mais elle est, à vrai dire, un peu bien surprenante.

Vous deviez, ce me semble, armer mieux votre sein,

Et raisonner un peu sur un pareil dessein.

Un dévot comme vous, et que partout on nomme...

Tartuffe : Ah! pour être dévot, je n'en suis pas moins homme ;

Et lorsqu'on vient à voir vos célestes appas,

Un cœur se laisse prendre, et ne raisonne pas.

Je sais qu'un tel discours de moi paraît étrange ;

Mais, Madame, après tout, je ne suis pas un ange [...] ⁴⁾.

ドゥロップルは、先のクリマルの台詞中の「*on n'en est pas moins honnête homme pour aimer une jolie fille*」（美しい娘を愛したからといって、立派な人ではないわけではない）という文言がタルチュフの「*pour être dévot, je n'en suis pas moins homme*」（信心家であるからといって、人間であることにはかわりはない）という文言に対応しているとした上で、これら二つの台詞が持つ意味の違いを指摘している。つまり、タルチュフは「人間の弱さ」のもとに自己弁護をしているのだが、クリマルは単にそうするだけでなく、自らの態度が「社交上の道徳」と両立し得ることを主張しているというのである⁵⁾。二つの台詞の比較におけるドゥロップルの指摘はここで終わっている。しかし、この両者の台詞を、それぞれの対話者の台詞とのつながりの中で捉え直すと、また別の問題が見出される。

これら二つの引用部分には、対話技法上の共通点が見られる。タルチュフがエルミールの台詞中の「*dévot*」という言葉を用いて切り返すのと同様に、クリマルはマリアンヌの「*honnête*」という言葉を自らの反論に用いている。つまり、対話における「語の繰り返し」の手法がどちらの場面でも用いられているのである。この点を考慮した上で、改めて比較してみると気づくことは、マリアンヌの対話のほうが、繰り返す言葉の多義性に重きを置いているということである。タルチュフの対話における「*dévot*」の場合と違って、マリアンヌの対話における「*honnête*」は、二人の人物によってそれぞれ異なる意味で用いられている。そして、後者では「*honnête*」の多義性こそが対話を展開させる軸になっているのである。

まず初めにマリアンヌがクリマルを「*honnête*」と形容する時、この言葉は未だ意味の曖昧さを十分に残している。クリマルはそれを、せいぜい社会における振る舞いの全うさという程度の意味で捉えることによって、「*honnête*」であることと若い娘を愛することは相反するものではないと切り返す。そこで次にマリアンヌが、この形容詞が持ついま一つの側面、すなわちキリスト教的な善良さという側面を取り出し、そこに言葉の意味を限定することで、クリマルに口を噤ませようとする。このとき、言葉の意味をずらすことによって、議論の次元は、社会における態度、社交性という次元から、宗教的道徳という次元へと移される。クリマルの意図は社会の礼節に反するものではないけれども、宗教的道徳には反するということになる。マリアンヌのこのような戦略的な応答に対して、クリマルは、宗教の次元においても「*honnête*」にはそこまで拘束的な意味がなく、マリアンヌが今この言葉に割り当てようとしている意味はむしろ「*saint*」に属するとして、糾弾を逃れる。こうして、「*honnête*」という言葉に、二人の人物がそれぞれ違った意味を割り当てることで対話が進行する仕組みになっていると言える。

このような、同じ言葉を意味をずらして用いるという対話の手法は、喜劇作家であるマリヴォーの常套手段の一種であり、台詞のやりとりで精彩を与える効果を狙うものであることは言うまでもない。しかし、この問題の対話に関しては、台詞回しの技法という側面以外に、モラリスト的な思想の表現という側面を見ることができると言える。対話の中心となっている「*honnête*」の概念についての考察から、この側面の検討を始めたい。

17世紀から18世紀にかけてのモラリストたちの文脈において、「*honnêteté*」とは「社交における道徳」であり、キリスト教的な道徳の観念とは一線を画すものであった。次のラ・ブリュイエ

ールの記述は、「honnête homme」というカテゴリーのあり方を示すものの一例として興味深い。

L'honnête homme tient le milieu entre l'habile homme et l'homme de bien, quoique dans une distance inégale de ces deux extrêmes.

La distance qu'il y a de l'honnête homme à l'habile homme s'affaiblit de jour à l'autre, et est sur le point de disparaître.

L'habile homme est celui qui cache ses passions, qui entend ses intérêts, qui y sacrifie beaucoup de choses, qui a su acquérir du bien ou en conserver.

L'honnête homme est celui qui ne vole pas sur les grands chemins, et qui ne tue personne, dont les vices enfin ne sont pas scandaleux.

On connaît assez qu'un homme de bien est honnête homme ; mais il est plaisant d'imaginer que tout honnête homme n'est pas homme de bien.

L'homme de bien est celui qui n'est ni un saint ni un [faux] dévot, et qui s'est borné à n'avoir que de la vertu⁶⁾.

これによると「honnête homme」は、「habile homme」と実質的に同一視されており、他方、「homme de bien」との間には、共通部分が残されながらも明確な区別が与えられている。道徳性の度合いにおいて、「honnête homme」は特に「homme de bien」との差異によってその意味領域が定められる。しかしここで、「homme de bien」が所持しているという「vertu」を「honnête homme」が持ち合わせるかどうかという問題は、「vertu」というものにどのような性質を与えるかという問題と緊密に連動するということを指摘したい。つまり、純粹にキリスト教的な美徳は「honnête homme」の条件とはなり得ないが、他人に対する配慮という「社交上の美徳」はまさにその存在条件を構成するものである。このことを考慮に入れた場合は、「honnête homme」と「homme de bien」との間にある道徳性の相違は「程度」ではなく「質」に関するものとして捉えられる。あるいは、こうした美徳という概念の揺れ動きによって「honnête homme」・「homme de bien」というカテゴリーのあり方自体が変更を迫られるとも言える。

モラリストたちの言説における道徳観念の「社会化」という現象、つまり、「キリスト教的な美徳」から「社交上の美徳」への重点の移行という現象については、エマニュエル・ビュリが考察している。この現象は17世紀から18世紀にかけての社会の変遷とともに生じたものであったとされている⁷⁾。「honnête homme」・「homme de bien」という二つのカテゴリーはこのように、道徳観念の変遷に伴って相互間の境界線が移動するような関係の上に成り立っていたのである。

このことを踏まえた上で、今度はマリヴォー自身のエッセイを参照する。『メルキュール・ド・フランス』掲載の「パリの住人についての手紙」と題された文章において作家は、ある種の「honnêtes gens」に言及する。

On y voit encore un troisième ordre de personnes [après des vices et des vertus] ; ce sont d'honnêtes gens d'une probité morale qui n'a pour principe, ou qu'un heureux caractère qui les porte à vivre avec honneur, ou qu'un goût de sagesse philosophique qui les maintient dans un esprit de justice et d'union avec les hommes. Ce sont de ces gens qui, bornés à satisfaire leurs petits plaisirs, tâchent, autant qu'ils peuvent, de ne troubler ceux de personne, de ces gens, en un mot, qui adoptent le frein des lois, moins, si vous voulez, par respect pour elles, que par ménagement pour le préjugé public.

Cette secte, madame, ne laisse pas que d'être un peu pyrrhonienne ; car elle n'a de vertus que par convention ; mais vivre bien avec les hommes, et penser autrement qu'eux, est une chose qui paraît si belle, et si distinguée, que dans bien des endroits à Paris vous ne passez pour homme d'esprit, qu'autant qu'on vous croit confirmé dans cette impiété philosophique⁸⁾.

これによると「honnêtes gens」は、キリスト教的な意味で有徳ではなく、あくまでも社会において他の人々とうまく調和しながら生活していくことを信条とする人々ということになる。彼らが「convention」（慣習）によってのみ持つ徳とはまさに「社会化」された徳である。この道徳は「sagesse philosophique」・「impiété philosophique」が支持するものであり、当時で言うphilosopheの身上とも言えるだろう。

このように見てくると、問題のマリアンヌとクリマルの対話は、「honnête」が孕む二重性(言わば内面的道徳と外面的道徳の競合)という性質を露見させるものである。道徳観念の変遷に伴って変化する、「honnête homme」と「homme de bien」という二つのカテゴリーの間の流動的な関係性が、この対話の根幹を成している。つまり、これら二つのカテゴリーを別のものとするクリマルと、これらを同一視するマリアンヌという、二人の対立が対話を進行させているのである。「honnête」の意味の揺れ動きという現象はこのような状況で生まれているのであり、意味をずらしつつ同じ言葉を繰り返すという演劇的手法も、この状況によってこそ成り立っていると言える。対話技法とモラリストの人間考察の密接な関係をここに見出すことができる。

マリアンヌとクリマルの対話の続きの部分において、再び「honnête」という言葉が使われる箇所を見てみよう。

Hélas! Lui-même [père Saint-Vincent], s'il savait mon amour, n'en serait point si surpris que vous vous le figurez, et n'en estimerait pas moins mon caractère ; il vous dirait que ce sont là de ces mouvements involontaires qui peuvent arriver aux plus honnêtes gens, aux plus raisonnables, aux plus pieux⁹⁾.

サン＝ヴァンサン修道士というのは、クリマルを敬虔な慈善家と見込んで彼にマリアンヌを託した人物であり、ここでクリマルは、自分の恋が彼によっても咎められないものであると言っている。注目したいのは最後の部分である。「honnête」、「raisonnable」、「pieux」という三つの形

容詞は、それぞれ「社交」・「理性」・「宗教」という人間の価値基準の存在を示唆しているようである。またこれらの相互補完的な価値基準のあり方は、先に考察した« honnête homme »と« homme de bien »の間の流動的な関係性と緊密に関わるものである。こうして見ると、これら三つの形容詞が示すそれぞれの意味領域は、互いに排他的なものでもなければ、びたりと重なり合うものでもないという、微妙な関係性の中に置かれるものとして現れてくる。そして、このような言葉の意味領域の曖昧さ・流動性への着目こそが、マリヴォーの文学的手法と人間観を結びつけるものと言えるのではないだろうか。

2. 価値観の流動性

マリアンヌとクリマルの対話から、言葉の意味の揺れ動き(ずれ)が対話手法として用いられる例を、もう一つ引用する。ここでも愛を表明しようとするクリマルと、気づかないふりをしようとするマリアンヌの言葉による攻防が展開している。

Car j'ai bien des choses à vous dire, Marianne ; je suis dans de bons sentiments pour vous ; vous vous en êtes sans doute aperçue?

Oui, monsieur, lui répondis-je les larmes aux yeux,[...] , oui, parlez, je me fais un devoir de suivre en tout les conseils d'un homme aussi pieux que vous.

Laissons-là ma piété, vous dis-je, reprit-il en s'approchant d'un air badin pour me prendre la main. Je vous ai déjà dit dans quel esprit je vous parle. Encore une fois, je mets ici la religion à part ; je ne vous prêche point, ma fille, je parle raison ; je ne fais ici auprès de vous que le personnage d'un homme de bon sens, qui voit que vous n'avez rien, et qu'il faut pourvoir aux besoins de la vie, à moins que vous ne vous déterminiez à servir ; ce dont vous m'avez paru fort éloignée, et ce qui effectivement ne vous convient pas¹⁰ .

マリアンヌへの恋慕を« bons sentiments »と言い表すクリマルに対し、マリアンヌは、それを「宗教的な善良さからくる好意」という意味へと、意図的に取り違え、クリマルを« pieux »と形容する。愛の告白を宗教の言葉で覆い隠そうとしているのである。するとクリマルは、自分は信仰家として話しているのではなく、「良識ある人間」として話しているのだと主張して、議論の次元を« religion »から« raison »へと移す。ここでクリマルが« homme de bon sens »という言葉に割り当てている意味は、現実をよく知り、その現実の必要に即して行動する人間という意味であるととれる。したがって、ここでは必然的に、マリアンヌに援助できるだけの経済的な力という側面をも含む。クリマルはこのような言葉の戦略によって、自らの態度を擁護すると同時に、マリアンヌに脅しをかけているのである。

ここで、「religion」と« raison »という観念の扱われ方に着目したい。これらは二人の人物によって、それぞれの思惑に沿うように議論の次元を設定する道具として利用されている。つまり、マリアンヌはクリマルの告白をはねつけるために« religion »を引き合いに出し、クリマルは逆に

告白を正当化するために「raison」を持ち出すというように、そうした観念の援用はあくまで彼らの対話戦略上のことであって、実際にこれらの観念についての議論が行われているわけではない。このように物語の局面において、登場人物たちが戦略的に「religion」と「raison」を用いるとき、これらの観念の射程は彼らの思惑に応じて設定されることになる。この対話における「raison」と「religion」の対立関係も、クリマルの意図が創り出しているものであって、恒常的なものではない。

登場人物の意図によって変化する「raison」や「religion」の様相を分析することは、多様な人物たちの台詞という装置において、人間の価値基準となるこうした観念を作家がいかに扱ったかを探ることとなる。以下に、これらの観念が引き合いに出される箇所をいくつか分析していく。

a. 商人の道徳

主人公はクリマルの援助を受けつつ、彼の紹介により、デュトゥールという女主人が営む下着屋に住み込む。デュトゥールは小ブルジョワの典型と言える人物であり、金銭へのあからさまな執着がその特徴である。この人物が、自らの境遇を嘆くマリアンヌをたしなめて次のように言う場面がある。

Dans le monde, on est ce qu'on peut, et non pas ce qu'on veut. Vous voilà grande et bien faite, et puis Dieu est le père de ceux qui n'en ont point. Charité n'est pas morte. Par exemple, n'est-ce pas une providence que ce M. de Climal? Il est vrai qu'il ne va pas droit dans ce qu'il fait pour vous ; mais qu'importe? Dieu mène tout à bien ; si l'homme n'en vaut rien, l'argent en est bon, et encore meilleur que d'un bon chrétien, qui ne donnerait pas la moitié tant¹¹⁾.

クリマルの魂胆を知っているデュトゥールは、彼の援助を「慈愛」や「摂理」といった宗教の言葉で覆い隠そうとする。宗教の語彙を使っているながら、実質はお金のことしか話していないという、皮肉が込められた場面となっている。このように、宗教の観念が引き合いに出される時は、そのままでは非難を免れないような現実の行動を覆い隠すための、隠れ蓑として機能することがある。

このようなデュトゥールの身上に関連するものとして、マリヴォーのエッセイを再び参照したい。パリの商人たちのお金への執着、商売のための手練手管を解説した後、マリヴォーは、彼らの善意というものについて述べている。

Vous me demanderez peut-être, madame, si la bonne foi règne dans la boutique des marchands.

Si vous entendez par cette bonne foi une certaine exactitude de conscience sans détour, en un mot cette bonne foi prescrite à la rigueur par la loi, je vous répondrai franchement que je n'en sais rien : en revanche, je vous dirai qu'il peut s'y trouver une bonne foi mitigée, qui, dégagée de la sévérité du précepte, s'accommode à l'avidité que les marchands ont de gagner sans violer absolument la religion. Le marchand partage le

différend en deux : la religion veut une régularité absolue, l'avidité veut un gain hors de tout scrupule. On est chrétien, mais on est marchand : ce sont deux contraires, c'est le froid et le chaud, il faut vivre et se sauver. Que fait-on? on cherche un tempérament : comme chrétien, je m'abstiendrai d'un gain exorbitant ; comme marchand, je le ferai raisonnable : le malheur est que ce n'est presque jamais le chrétien, mais bien le marchand qui fixe ce raisonnable¹²⁾.

商人たちは、利益を追い求める商人としての立場と、それを控えようとするキリスト教徒としての立場のどちらからも逃れることができない。商人という境遇の中で「生き」ると同時に、神によって「救われ」ねばならないのである。そして、対立する価値観の板挟みになった彼らは、「tempérament」（妥協）という道を探り、これら二つの価値観を折り合わせることになる。

こうした異なる価値観の折り合わせという作業を、デュトゥールは言葉の上で行う。特にこの作業が必要となるのは、クリマルの援助を拒絶しようとするマリアンヌを思いとどまらせる時である(マリアンヌを預かることでクリマルから謝金を得るデュトゥールには、自らの利益のためにマリアンヌとクリマルの仲を保つ必要がある)。デュトゥールはマリアンヌに対し、クリマルの魂胆を逆に利用するようにと説得を試みる。

Tenez, Marianne, me disait-elle, à votre place, je sais bien comment je ferais ; car puisque vous ne possédez rien, et que vous êtes une pauvre fille[...], je prendrai d'abord tout ce que M. de Climal me donnerait, j'en tirerais tout ce que je pourrais : je ne l'aimerais pas, moi, je m'en garderais bien ; l'honneur doit marcher le premier, et je ne suis pas femme à dire autrement, vous l'avez bien vu ; en un mot comme en mille, tournez tant qu'il vous plaira, il n'y a rien de tel que d'être sage, et je mourrai dans cet avis. Mais ce n'est pas à dire qu'il faille jeter ce qui nous vient trouver ; il y a moyen d'accommoder tout dans la vie. Par exemple, voilà vous et M. de Climal ; eh bien! faut-il lui dire : Allez-vous-en? Non, assurément : il vous aime, ce n'est pas votre faute, tous ces bigots n'en font point d'autres. Laissez-le aimer, et que chacun réponde pour soi. Il vous achète des nippes, prenez toujours, puisqu'elles sont payées ; s'il vous donne de l'argent, ne faites pas la sottise, et tendez la main bien honnêtement, ce n'est pas à vous à faire la glorieuse¹³⁾.

クリマルの本意を知りながら援助を受け続けることは、貞淑さ(sagesse)という宗教的道德には、実際には反するものである。しかし、デュトゥールは言葉の上ではこの道德を尊重し、同時にお金や贈り物を受け取るという実際の行動をも肯定する。このとき、貞淑さという観念に操作が加えられている。クリマルがマリアンヌを愛するのは彼自身のせいであってマリアンヌのせいではないとすることによって、他人の行動に責任を持つことが貞淑さというものの射程外に置かれる。これによって、貞淑であるためには、自発的にそれに反する行動をとらないだけで十分ということになり、あくまでも他人の行動は拒む必要がないことになる。貞淑さを放棄するのではなく、その観念の幅を狭めることで、利益と道德(あるいは名誉)をともに失わないで済むよう画策しているのである。

対立する価値観を折り合わせる作業は、マリアンヌの幼少期の育ての親である司祭の妹の言葉にも見られる。司祭の妹は、マリアンヌとともに田舎からパリに出てきて間もなく死の淵を彷徨い、一人残されるマリアンヌをサン＝ヴァンサン修道士に託す手筈をなんとか整えると、最期の言葉として、常に貞淑であるようにと彼女に諭す。

Après cette unique précaution qui me reste à prendre pour vous, je n'ai plus qu'une chose à vous dire : c'est d'être toujours sage. Je vous ai élevée dans l'amour de la vertu ; si vous gardez votre éducation, tenez, Marianne, vous serez héritière du plus grand trésor qu'on puisse vous laisser : car avec lui, ce sera vous, ce sera votre âme qui sera riche. Il est vrai, mon enfant, que cela n'empêchera pas que vous ne soyez pauvre du côté de la fortune, et que vous n'ayez encore de la peine à vivre ; peut-être aussi Dieu récompensera-t-il votre sagesse dès ce monde. Les gens vertueux sont rares, mais ceux qui estiment la vertu ne le sont pas ; d'autant plus qu'il y a mille occasions dans la vie où l'on a absolument besoin des personnes qui en ont. Par exemple, on ne veut se marier qu'à une honnête fille : est-elle pauvre? on n'est point déshonoré en l'épousant ; n'a-t-elle que des richesses sans vertu? on se déshonore ; et les hommes seront toujours dans cet esprit-là, cela est plus fort qu'eux, ma fille ; ainsi vous trouverez quelque jour votre place[...]¹⁴⁾.

貞淑さ(« vertu »)は「魂を豊かにする」が、それは金銭面において豊かさを保証するものではない。身寄りがなく貧しいマリアンヌにとって、貞淑さと現実的(経済的)価値観は相容れないものであるとさえ言える。ところが司祭の妹は、貞淑であるということに、宗教的な価値だけでなく現実的な利益、つまり結婚によって富や良い身分を手に入れられるという価値を付加することによって、マリアンヌに対して貞淑さの重要性を説く。実際には相容れないはずの価値観が、このようにして折り合わされる。デュトゥールが貞淑というものの観念領域を狭めることによって現実の利益を守ったのに対し、司祭の妹は逆にその観念領域を拡大することによって貞淑を擁護しているのであり、これら二人の人物の妥協の手法は対照的なものとなっている。しかしいずれの場合にも共通して、宗教的道德と、現実生きるための経済的な必要とを折り合わせるための操作が行われているのである。

司祭の妹からサン＝ヴァンサン修道士を経て、クリマルの援助の下、デュトゥールの店に落ち着くに至るまで、マリアンヌの置かれている社会(場)は、上に見たように、宗教と経済のジレンマに支配された空間である。そしてこのジレンマを解消する(あるいは解消したように装う)ために、道德観念が自由に操作されるのである。

b. 修道女

デュトゥールの店に身を置いているマリアンヌは、教会で貴族の子息ヴァルヴィルと出会う。二人は互いに想い合い、結婚の話が持ち上がるが、身分違いの結婚に周囲は反対する。そして、ヴァルヴィルの親戚たちによる結婚阻止のための陰謀で、マリアンヌは誘拐され修道院に預けられる。次の引用は、その修道院の院長が、ヴァルヴィルとの結婚を諦めるようにとマリアンヌに

諭す場面である。

Toute estimable que vous êtes, ils n'en rougiraient pas moins de vous voir entrer dans leur alliance ; vos bonnes qualités n'en rendraient pas votre mari plus excusable ; on ne lui pardonnerait jamais une épouse comme vous ; ce serait un homme perdu dans l'estime publique. J'avoue qu'il est fâcheux que le monde pense ainsi ; mais dans le fond, on n'a pas tant de tort ; la différence des conditions est une chose nécessaire dans la vie, et elle ne subsistrait plus, il n'y aurait plus d'ordre, si on permettait des unions aussi inégales que le serait la vôtre, on peut dire même aussi monstrueuses, ma fille. Car entre nous, et pour vous aider à entendre raison, songez un peu à l'état où Dieu a permis que vous soyez, et à toutes ses circonstances ; examinez ce que vous êtes, et ce qu'est celui qui veut vous épouser ; mettez-vous à la place des parents, je ne vous demande que cette petite réflexion-là¹⁵⁾.

修道院長は、身分違いの結婚を許さない社会の慣習を遺憾なことであると述べながら、すぐにその慣習を擁護する。「conditions」（身分）の区別というものは秩序ある社会生活のために「必要」なものである。そして、その遵守の重要性を理解することは、道理を理解する（« entendre raison »）ことなのであり、それには「神」によって与えられた境遇について考えることで足りるというのである。

続いて修道院長はマリアヌに、俗世間を捨てて修道女になることを勧める。

Quel plus grand avantage d'ailleurs peut-on tirer de sa beauté que de la consacrer à Dieu, qui vous l'a donnée, et de qui vous n'éprouverez ni l'infidélité ni le mépris que vous avez à craindre de la part des hommes et de votre mari même? C'est souvent un malheur que d'être belle, un malheur pour le temps, un malheur pour l'éternité. Vous croirez que je vous parle en religieuse. Point du tout ; je vous parle le langage de la raison, un langage dont la vérité se justifie tous les jours, et que la plus saine partie des gens du siècle vous tiendraient eux-mêmes¹⁶⁾.

修道女になるということの現実的な利点、つまり結婚や恋愛の不幸から自分の身を守るという利点を強調する説得方法には、先に挙げた司祭の妹の「妥協の手法」と相通ずるものがある。しかしここでは、「raison」が引き合いに出されていることに注目したい。自分は修道女として話しているのではなく、理性の言葉を話していると院長は言う。これによって院長の主張は、自らの立場(身分)のみに根ざした偏った考えではなく、より広い視野からの考えという様相を帯びる。このように院長が援用する「raison」は、現実には即した確かな価値観として、社会の慣習(convention)や宗教的徳を補強する役割を担う。

c. 身分違いの結婚

ヴァルヴィルの母親であるミラン夫人は、初めは世間への配慮から二人の身分違いの恋愛に難色を示すものの、不憫なマリアンヌに対する母親のような気持ちに加え、ヴァルヴィルの熱心な懇願に抗えず、彼らの恋愛・結婚を認めることを決心する。次の引用は、マリアンヌとヴァルヴィルを前にして二人の結婚について話す、ミラン夫人の言葉である。

Je songe que Valville ne blesse point le véritable honneur, qu'il ne s'écarte que des usages établis, qu'il ne fait tort qu'à sa fortune, qu'il peut se passer d'augmenter. Il assure qu'il ne saurait vivre sans toi ; je conviens de tout le mérite qu'il te trouve : il n'y aura, dans cette occasion-ci, que les hommes et leurs coutumes de choqués ; Dieu ni la raison ne le seront pas¹⁷⁾.

身分違いの結婚は世間の慣習には背くが、神にも理性にも背くものではないとしている。それぞれの与えられた身分に相応の振る舞いをする事、周囲の人々とその慣習に逆らわないことは、社交上の道徳の範疇である。ミラン夫人はこの道徳に対抗するため、宗教と理性の双方に訴える。先に見た修道院長においては、神も理性もあくまで慣習を支持するものであった。それに対しミラン夫人における宗教・理性は、世間にはびこる慣習の支配を乗り越えるために必要な価値観である。

ミラン夫人の親戚たちは二人の結婚に反対するあまり、マリアンヌを中傷する。その中傷の不当性を主張する時にも、ミラン夫人は「raison」を援用する。

Dieu nous a caché ce qu'elle est, et je ne déciderai point ; je vois bien qu'elle est à plaindre ; mais je ne vois pas pourquoi on l'humilierait, l'un n'entraîne pas l'autre ; au contraire, la raison et l'humanité, sans compter la religion, nous portent à ménager les personnes qui sont dans le cas où celle-ci se trouve[...]¹⁸⁾.

「raison」は「humanité」と一緒になって、マリアンヌを擁護する。宗教の慈愛を持ち出すまでもなく、理性と人間性が、人に対してとるべき態度の判断基準を与えるのである。ここに、慣習(convention)の遵守という価値観が入り込む隙はない。

ミラン夫人という人物のこうした理性・宗教の捉え方に説明を付け加えるため、マリアンヌによるミラン夫人の性格描写からの一節を参照する。

Mme de Miran avait plus de vertus morales que de chrétiennes, respectait plus les exercices de sa religion qu'elle n'y satisfaisait, honorait fort les vrais dévots sans songer à devenir dévote, aimait plus Dieu qu'elle ne le craignait, et concevait sa justice et sa bonté un peu à sa manière, et le tout avec plus de simplicité que de philosophie. C'était son cœur, et non pas son esprit qui philosophait là-dessus¹⁹⁾.

神について自己流の捉え方をするという態度は、慣習を通してではなく個人の意志で神を信じる

というミラン夫人の身上を表している。また、哲学ではなく素朴さをもって考える、あるいは精神ではなく心によって思索をするということは、普通ならば精神(esprit)の領域にあるはずの理性(raison)が、彼女においては心(cœur)・感情の領域に入りこんでいるということであると言える²⁰⁾。ミラン夫人において理性がマリアヌを擁護する側に回るのも、その理性に感情的側面が含まれているからである。

ミラン夫人は自らの感情に基づいて宗教・理性に直接訴えることにより、慣習を退け、マリアヌとヴァルヴィルの恋愛・結婚を擁護する。これは、個人の感情が社会集団の法を突き抜ける瞬間であると言える。

以上において、『マリアヌの生涯』におけるマリヴォーの人間観の反映を、登場人物たちの対話という切り口から見てきた。人間と社会との関係はこの作品の中で、社会空間を覆う諸価値観に対する人間の態度として見出されるのであり、それは人物たちの言葉の選択に反映していた。マリアヌとクリマルの対話が如実に描き出す流動的な「*honnêteté*」の概念を確認し、また多様な社会空間における「*raison*」・「*religion*」といった観念の扱われ方を見た今、この物語における理性・宗教・(社会の慣習に従うという意味での)礼節という価値観のせめぎ合いが独特の様相で現れる。こうした価値観はそれぞれに揺れ動く射程を持つがゆえに、価値観相互の関係性も多様に変化する。そして重要なのは、このせめぎ合う動きが、主人公の社会的上昇のドラマを進行させる原動力になっているということである。

身分の固定という慣習が支配する世界において、身分違いの結婚をすること、つまり慣習を破ることが、マリアヌの言わば最終目標である。この目標を達成するには、いくつもの言説を経由する必要がある。「商人の道徳」を体現するデュトゥールの言説は、言葉の意味領域への操作によって現実の行動の自由を確保するものであったが、正面から慣習を破ることは到達しなかった。修道院長は理性と宗教を掲げるが、それらは慣習を擁護する側に回った。ミラン夫人の、個人の感情に基づいた宗教と理性への訴えだけが、社会空間にある見えない壁を突き抜ける力を持つのであった。こうしたドラマが軽妙で精彩に富んだ対話にのせられているということに、この作品のおもしろさがあると言えるだろう。

注

- 1) 主人公の出自に関しては複雑な事情がある。まだ乳児の時に追いはぎに家族を殺され、一人生き残ったマリアヌは、自分が何者であるのか知らず、またそれを知る人に出会うこともない。かすかな手がかりから、自分は貴族の娘なのではないかと推測するのみである。出自をめぐるこのような曖昧な設定は、作品全体が持つ曖昧さを増殖させる要素である。例えばマリアヌが本当に貴族ならば、この物語は主人公が本来の身分を取り戻す物語ということになるが、彼女が実際は平民ならば、「成り上がり」の物語ということになる。このように複数の作品解釈の可能性を与える設定なのである。
- 2) Leo Spitzer, « A propos de *La Vie de Marianne* » dans *Etudes de style*, Gallimard, « Collection Tell », 1980. ただし、このシュビツァーの論考はジョルジュ・プーレの論考(Georges Poulet, « La Distance intérieure,

Marivaux » dans *Etudes sur le temps humain*, Plon, 1968.)に呼応する形で書かれたものである。マリヴォーの作品全体を扱ったプーレの論考は、状況に応じてその都度新たに生まれ変わるという「マリヴォー的人物像」を描き出すものであった。マリヴォーの人物における時間的広がりやの欠如、無時間性という側面を強調するプーレに対し、シュピッツァーは、マリアンヌという人物が持つ性格の一貫性に基づいて、人物の時間的広がりやを強調するのである。

- 3) *La Vie de Marianne*, éd. F. Deloffre, « Classiques Garnier », 1957, pp.109-110.
- 4) « Tartuffe » dans *Œuvres complètes*, éd. M. Rat, « Bibliothèque de la Pléiade », 1956, acte 3, scène3.
- 5) *La Vie de Marianne*, p.109, note 1.
- 6) La Bruyère, *Les Caractères*, éd. R. Garapon, « Classiques Garnier », 1962, p.367.
- 7) Emmanuel Bury, *Littérature et politesse*, PUF, 1996, p169-203.
- 8) « Lettres sur les habitants de Paris » dans *Journaux et Œuvres diverses*, éd.F.Deloffre et M. Gilot, « Classiques Garnier », 1988, p.9.
- 9) *La Vie de Marianne*, p.119.
- 10) *Ibid.*, pp.112-113.
- 11) *Ibid.*, p.100.
- 12) *Journaux et Œuvres divers*, p.19.
- 13) *La Vie de Marianne*, pp.46-47.
- 14) *Ibid.*, pp.19-20.
- 15) *Ibid.*, pp. 297-298.
- 16) *Ibid.*, pp.300-301.
- 17) *Ibid.*, p.205.
- 18) *Ibid.*, p.328.
- 19) *Ibid.*, p.171.
- 20) ミラン夫人における « cœur » と « esprit » の関係は注目すべきものであり、同じく性格描写の中には次のような記述もある。

Non, la sienne [sa bonté] était une vertu ; c'était le sentiment d'un cœur excellent ; c'était cette bonté proprement dite qui tiendrait lieu de lumière, même aux personnes qui n'auraient pas d'esprit, et qui, parce qu'elle est vraie bonté, veut avec scrupule être juste et raisonnable, et n'a plus envie de faire un bien dès qu'il en arriverait un mal. (*Ibid.*, p.169)

特別講演について

去る5月9日、2009年度京都大学フランス語学フランス文学研究会総会が開催されました。京都大学フランス語学フランス文学研究室との共催で行われた総会特別講演では、アントワーヌ・コンパニオン氏（コレージュ・ド・フランス教授）とパトリツィア・ロンバルド氏（ジュネーヴ大学教授）が以下の演題で講演くださいました。

Antoine Compagnon : « “Proust, c’est le diable” »

Patrizia Lombardo : « Littérature comme connaissance chez Stendhal »

このうちコンパニオン氏の講演は、ジャン＝イヴ・タディエ氏の編集によりガリマールから出版予定の論文集 *Proust et ses amis* に掲載予定のため、本誌では、5月19日に行われたコンパニオン氏の講演 « Les malheurs de Saint-Loup » を収録することを、読者のみなさまにお断りさせていただきます。